

年頭敬白

慰霊供養と仏供養

旧年中はお世話役のお執持によつて本徳寺の行事を勤めることができました。心よりお礼申し上げます。

本徳寺への懇志が続く限り年中行事を勤めねばならないと先代の遺言でした。

しかし、春と秋の彼岸会は五日間と長く、初日と最後はほとんど参詣が有りません。その上常に大幅な赤字を計上することもあり、今年から三日にさせて頂くことを総代会で決めさせて頂きました。

娑婆の業流に棹さすことがいかに困難な事であるか。深く感じ入った次第です。

今年も滅入る気持ち奮い立たせて真宗の法義興隆のため勤めさせて頂く所存です。

御正忌報恩講の十五日午後二時からの報恩講式には是非ご出席下さい。

三年前から名古屋山仏舍利

塔で三大仏供養を勤めさせて頂いている。釈尊の遺徳を追慕し、降誕から成道、涅槃に至る釈尊の行実を心に深く追憶し仏徳を賛嘆する行為である。同心の僧侶が参集して、釈尊の偉業を尊崇の念をもつて観察し、一つ一つの決められた作事を通して供養をいたし、読経のなかに教の真理を自覚し、仏徳を賛嘆する。これを仏供養という。

仏事の基本は、迷いの中にある私が、仏法を聞いて、菩提心に目覚め、悟りに至る事を前提としている。もちろん、一挙に天命開悟は無理だから、それぞれの仏縁を通して機が熟するのを待つわけで、各自それぞれの境位があることとなる。したがって、仏事

に参加する人々の思いは一つではない。つねに仏説を聞いている者もいれば、初めて手をあわす者もいる。

名古屋の「花まつり」のように何千人と多くの参加者がある場合は、思いを釈尊の遺徳に焦点を合わせることは難しい。大多数の者は、名古屋に納骨した亡き父や母に手を会わすのが正直な思いである。ここに故人の霊を慰めその成仏を願うという、典型的な慰霊供養が出現する。

さて、話は変わるが、地方自治体が一般市民に市営墓地を分譲したり納骨のサービスをやる例はどこでもある。しかし、自治体と深い関係をもった任意団体が、一般市民を対象に納骨を積極的に受け入れ、なおかつ永代供養料を明示して徴収しているケースは全国でも珍しい。任意団体が慰霊事業を行うことはさし

て問題ないが、市の観光施設を百%利用し、仏舍利塔の建設と舍利奉納を行った姫路市連合仏教会の僧侶に供養を全面的に依頼して年間四千万を優に超える供養収入が計上されているとなると、部外者が聞いたなら目を白黒させるに違いない。

習慣とは恐ろしいもので、姫路市連合仏教会も違和感なく七〇年来この慰霊供養のお手伝いをしてきている。なんと法礼は報償費として供養収入の十分一に満たないというから、お坊さん宅配サービス業者顔負けである。慰霊供養にわざわざ半日を費やして毎月奉仕することは今となってはお寺の大きな負担となってしまう。それでも今年も市中寺院の有志がご奉仕をする。有り難いことだ

新年謹言

新年を迎え、役員の皆様におかれましては、すこやかに新春を迎えられたこととお慶び申し上げます。旧年中は、常々、皆様のお蔭を頂き諸行事をはじめ寺務を修業させて頂きました。心から感謝申し上げます。昨年一年も、お寺がメディアに取り上げられた。TBSの高島礼子の家宝探索である。メディアへの露出は文化財を持つ以上致し方ないことではあるが、守らねばならぬ責任の重さは如何ともしがた。防犯やメンテナンスのことがを思うといささか気が滅入ります。本堂や経堂、書院の老朽化など放って置くわけにも行かず、関係者に理解をもとめ微力ながら前進しようと思えます。今年も播州の歴史・文化発揚の為、本徳寺の護持にご協力いただき、よろしくお願い申し上げます。

老・病・死の役割

昨年十二月で古稀を迎えた。古来稀なりで長寿を祝う事になるが、昨今の高齢化社会ではその希少価値は無い。ちなみに昨年七月の厚生省の報告によると、日本人の「平均寿命」が過去最高の八十四才。六十五才以上の高齢者が人口の二十七%に達したとか。いよいよ我々団塊の世代が総高齢化に突き進む。これから税金を納めない年金受給者が一挙に増えてくる。国の財政はたまったものではない。そのせい、か、元気な高齢者はもつと働けと叱咤激励される。死ぬときはぐずぐずせず、ぼつくり逝くのがお国のためだなどと、陰口をたたかれ、いつの間にか長寿を祝う、老人を大切にすることを文はなくなつた。社会福祉制度によつて、大半の高齢者は最低限の生活は保証される。有り難いことだ。しかし、実は老を生きると言うことはそれほど容易いことではない

ことを実感する。老人は社会的義務を軽減される代わりに、日々の生活体験を通して老・病・死を抱え込む事になるからである。

ところが、元気な者もそうでないものも高齢者はまだまだ欲界のど真ん中。これからが人生と、ジムに励む御仁、病に立ち向かう人、趣味に熱中する人、社会奉仕に生きがいを見出す人、このように何かやらないと身が持たないという娑婆界の習慣を断ち切れず、「生きててなんぼ」の世界に固執する。そういう意味で老いを生きるとはやっかいなことなのだ。かように老後のバリエーションはいくつも選べるように見えるが、すべからず老・病・死を一時的に回避する本能的諸行である。いくらあがいても生者必滅・会者定離に収束するのとは間違いないのに、老人の本来的有り様に気付く人は少ない。それでも、両親を送り、伴侶と別れ、同世代の輩が逝き出すと、娑婆の縁

もいよいよかと人は自覚し始める。七十にもなるとオギャと生まれたときが命の始まり、息をしながらなつたら終わりだなどと娑婆の浅薄な生命観では手に負えなくなる。はいよ老・病・死を正面から見据え命の本性を知る必然に迫られる。残念なことには世間では拉致が明かない。仏法に聞かれないと言わう。これが本当の終活である。仏陀は世間智をはるかに凌ぐ生命の真相を発見した。この生命観は俱舎論によれば「父母の精血を縁に自らの業識より生ず」だから、今生の心口加印されて流れて行く。仏陀の因縁果の道理を踏まえて見ると生死の根底に息づく業識が全貌を顕す。「死んだら終い」などとたかをくくつてはおられない。私も余命をかけて、本徳寺の老人の仕事をしていこうと思う。

新春敬白

近くて遠い御隣山

新年を迎え、有縁のご寺院におかれましてはますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

昨年からお東の船場本徳寺の修復が始まりました。その関係で龜山本徳寺に問い合わせがありました。龜山の方は県指定の為修復のハードルが高いこと、船場に比べて伽藍構成が多いこと、既に市指定の建物の多くが修理済みのため、緊急度が低くいと認識されているようです。しかし、手つかずの本堂と経堂の老朽化は激しく、近年に修復の準備に取りかからねばなりません。その際には募財を広く求めねばなりません。その節には播州の真宗文化財存続のためにもご協力頂きますようお願いいたします。

今年も引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

昨年十一月に、東派船場本徳寺から報恩講の出席依頼があり初めてお参りさせて頂いた。

お西とお東は外から見ると同じ様に見えるが中身は相当の違いがあることを感じた。

単に為政者が勢力を削ぐために二分したというのはそもそも俗説である。お西とお東のルーツを辿ると今から四百年前の石山戦争に遡る。和睦を受け入れ宗門を新しい時代体制に変更しようとした顕如派とあくまでも中世的な門末統治を堅持しようとした教如派の対立構造がその原因である。そこに為政者の利害が関与して東西が分流したのだ。

大坂から京都西六条に移転後、すぐに顕如は亡くなり教如が宗主となるが、顕如派家臣団が秀吉の威光を利用して教如から准如に首がすげ替えられた。一種のクーデターで

ある。この時点で既に蓮如の中世本願寺は二つに分裂をしていた。この二勢力は寺門の運営に当たって時代社会と向かい合う姿勢の違いである。

誤解を恐れずに言う。顕如は時代の変遷に積極的に体制を変えてまですべて対応しようとし、教如は伝統を遵守し転変する世俗にどの様に表現するかに重きを置く。

従って時代の目からみれば、前者は優柔不断でどうにでも順応するし、後者は頑固一徹より古色蒼然と映るのだろう。いざれにしても両派分派の当初より東西の性格は明確な違いがあり、時代の変遷と共に異なる対応を世に残しつつ現在に至っている。

さて話は播州の真宗分派に戻るが、ちまたでは池田輝政の号令により龜山本徳寺は東派から西派に転派させられたというシナリオが通説である。しかしこれもまた結果であつ

て原因ではない。しかし、近世とはいえトップの号令だけで寺門体制を変えることはありえない。

私の考えはこうである。地方の本願寺の拠点龜山本徳寺は常に中央とリンクして機能する。本願寺の体制が変われば直下の本徳寺も同様に変わる。宗主が教如から准如に変われば本徳寺が准如派に移行するのは当然である。

当時、池田輝政も本徳寺主教円（後に准専）も共に教如と諍いがあつたことから准如派へスムーズに移行したのである。

しかし、播州は以前より教如派の勢力があり、教如が裏方として退陣、龜山が表派となって以来、教如派家臣団は潜在化していた。後に教如が本願寺を別立するにあたり、姫路城主本田氏に願い出て、本山同様に、船場に本徳寺を別立したのである。

本徳寺住職 大谷昭仁

新年のご挨拶

麗姫会の皆様へ

麗姫会の皆様のご奉仕によりお寺の行事の準備ができ、境内や建物の清掃が行き届きます。年頭に先立ち、心より感謝申し上げます。

不安と困惑の娑婆世界に身を置きながら、今年も、如来大悲の空気を思い切り吸い込んで、今の幸せに気づかせていただければと思います。本年も宜しくお願いいたします。

感謝の一年

今年には平成最後の亥年です。亡くなった前坊守は亥年生まれで、それで判断するのはよくないのですが、猪突猛進のところがあります。後ろを振り返ることなく、とても前向きの人でした。後ろばかり見てくよくよする私には、見習うべきところ。去年の九月、姫路仏教連合会

の講演会の時、コーラスも助演させていただきました。

その時も普通のコーラスではなく、何か印象深いものにしてたくて、一年ほど前からいろいろと悩んでいました。金子みすゞさんの詩を朗読して、それに関した仏教讃歌を歌ったらどうだろうと思いにいたりしました。

誰かに相談したかったのですが、金子みすゞと仏教讃歌のどちらにも精通している人が見当たらず、一人で悶々と考える日が続き、なかなか決断がつかねていました。

又、どの詩とどの歌が合うだろうか、と考えるのも一苦労で、段々これでいいのかと自信まですなくなっていました。

金子みすゞさんの詩は、昔から好きで、墨で書いて作品にしたことでもあります。どこか寂しげで、悲しげで、でも深く優しいところが惹かれます。しばらくはこの詩に浸ってみよう、と考えるのをやめてみたのです。読んでいくうちに、分かった

のです。どの詩も仏様の眼差しで見られることが。そのことを知って頂ければいいのではないだろうかと思っただけです。

半年後、ようやく詩と歌が決まり、部員の皆さんに伝えました。それから何度も練習を重ねるうちに、抱いていた不安は、杞憂だったとわかりました。上月さんの朗読は朗々として素晴らしく、歌も美しいハーモニーに仕上がりました。本番は大喝采で、その後、あちこちからお褒めの言葉もたくさんいただきました。

私一人で決めていいのかよくよく考えていたこと、不安でいっぱいだったことが、こんなにも皆さんに受け入れていただけて、とても私の自信になり、感謝で一杯の気持ちです。

今年のは亥年にあやかり、もつと自分の気持ちを前面に出していけたらいいと思っっているところ。どうぞよろしくお願いいたします。

本徳寺坊守

春風表敬

正月を考える

すこやかに新春を迎えられましたことお慶び申し上げます。旧年中は寺門の護持と墓地の管理にご協力いただき、まことに有り難うございました。特に昨今、後継者不在のため墓じまいがどこでも盛んです。皆様の中にもそのような問題を抱えておられる方は墓地管理部までご相談ください。墓じまいの際には、墓石は石材店で撤去してもらえませんが、遺骨は総墓に納骨するか、あるいは本坊の納骨壇で一代限りの管理とするか、いろいろの方

亀山本徳寺
墓地管理部

法があり、真宗では遺骨への執着はなく、宗祖のお考えも娑婆のもの、は娑婆に還せが原則です。なお、十二日から十六日まで本坊で御正忌報恩講を、八日に厳修します。ご参拝下さいます。

こたつにミカン、お雑煮におせち、いつもの年末年始の風情である。お寺はそういうわけにはいかぬ。大晦日から元旦にかけて時間単位の仕事に追われる。夕刻より除夜会を勤め、年越し蕎麦もほどほどに寒風すさぶ鐘楼台で勤行だ。そのうちに百人を超える門信徒が集り、壺百八つの鐘突を連打する。鐘突が終わらぬうちに、本堂で元旦会のお勤めが正月午前0時より始まる。締めは、住職が法話をし、最後に残った方々とお屠蘇を頂く。一連の勤めが終わって戸締まりをし、大門にかんぬきを入れ、ホッとすることが午前三時である。さて、修正会（元旦会）を勤めさせて頂きながらその起こりを考えさせて頂いた。平素の暮らしを顧みて、間違いを自覚し、過ちを懺悔して、今年からは正しい

善い生き方をしようと決意するから、正月と言うらしい。

中道を行ずる事が正しい。仏の道を進むことだと言

私もこの「正しい」生き方をしようと思つたその瞬間ハタと気づいた。「正しい生き方」とは何かである。この俗世界において、「正しさ」の基準はどこにあるのだろうか。何をもちて「優れている」「いえるのか」「善い」とは誰が判断するのか？

私はこう愚考する。絶対の「正しさ」は仏の智慧であつて、我々には誰にもはつきりと認知できないしろものだ。自己の行為が普遍的な「正しさ」に近ければ近い程「正しい」と認められるのではないか。

まず、お寺に身を置く者だから、お釈迦様に聞いてみる。釈迦の教えに八正道と云うのがある。仏の智慧を得て悟りにいたる方法を体系的に示したものである。簡単に言うと、両極端に偏らず調和の取れた状態、いわば中道の生き方である。「正」は「優れている」「善い」「的になつた」「バランスのとれた」という意味を総括した「正しさ」である。ここでは普遍的に正しい

それがなぜ釈迦は「正しさ」の基準を明示しないのだろうか。おそらく欲界にいる人間は明示されたものを利用して己を利する行動をしてしまひ、仏道に反する道を行くことになるからである。それでも「トライアルアンドエラー」（試行錯誤）で何度も失敗し、反省し、時には大きな責任を負つて生きていく生き物である。しかしそのたびに判断力が培われ、「正しさ」の精度を上げる事が出来るのだと思

亀山本徳寺副住職